

三浦哲郎初期恋愛小説

—『週刊平凡』にみる—

近藤 洋子

三浦哲郎は、「忍ぶ川」(60年10月『新潮』)の芥川賞受賞(61年)後、「恥の譜」(61年3月)「初夜」(61年10月)「帰郷」(62年2月)など自伝的小説を発表した。

その後62年5月から、創刊二年後の『マドモアゼル』(小学館)に、「湖影」の十一回に亘る連載を始めた。連載開始にあたり三浦は「ぼくの今まで書いた小説は愛の一つの形には違いないが、ぼくの理想とする愛の世界ではなかった。この小説で、はじめて多くの理想と考えていた純愛の世界を書いてみたいのです。」(『マドモアゼル』同年5月号)と語っている。拙論「三浦哲郎初期恋愛小説論—「湖影」をめぐって—」では、「湖影」の純愛と、「忍ぶ川」の古風と評された愛の世界とが通底していると論じた。

三浦は「湖影」連載終了から二年後の65年7月から『週刊平凡』(59年5月創刊、平凡出版)の「恋愛百景」に連載を載せる。「恋愛百景」は65年6月10日号から始まった企画で、読み切り小説(12・13枚、4ページ)を、異なった作家が順に一話ずつ執筆し、合計百話掲載するというシリーズものであった。四人の作家、戸川昌子、富島健夫、松本孝、三浦哲郎の競作である。66年3月に戸川昌子は佐藤愛子に、松本孝は田辺聖子に交替する。三浦は第四話から最終の第一〇〇話(67年5月25日号)までの全二五話を執筆している。本稿は、『週刊平凡』という新しい場における恋愛小説を対象とした、三浦哲郎の小説

三浦哲郎初期恋愛小説

研究のための覚書である。

『週刊平凡』は、平凡出版株式会社が59年5月に創刊した雑誌である。キャッチフレーズを「テレビのある茶の間の娯楽誌」として、テレビの普及台数が三百万台に達したのを機に創刊した。創刊号は、98ページ、定価四〇円、発行部数51万部。先行の『週刊文春』『週刊現代』が定価三〇円の時代に、四〇円と豪華な印象を与えた。二代目社長清水達夫は「表紙づくりで基本的なポリシーとして決めていたのは、異種交配という違う世界の話題の人物を組み合せる方法である。例えば、スポーツマンと女優、政治家と流行歌手、映画女優とファッションモデルなどという組み合わせである。」と述べている。創刊号はテレビの時代に相応しく、白を背景に赤いスポーツカーに、当時人気のあったNHKアナウンサー高橋圭三と人気スター団令子に乗っているという表紙であった。同年12月発行の年末発売第35号は発行部数を88万部に伸ばし、さらに60年12月発行の「新春特別増大号」(定価五〇円)は百万部を超えた。

三浦が「恋愛百景」に寄稿していた66年6月当時の、『週刊平凡』読者の現状について、以下のような調査報告がある。

○性別 女性81・2%、男性18・8%

○年齢 18歳〜19歳21・8%、16歳〜17歳15・2%、20歳〜21歳15・0%、30歳以上13・7%、22歳〜23歳12・4%、24

三浦哲郎初期恋愛小説

歳 25歳9% 以下略

○学歴 高卒41・1%、中卒31・2%、高校生14・0%、短大卒2・9%、中学生2・3%、大学生1・8%、短大生1・7%、大学卒1・3%、その他3・7%

○職業 会社事務員16・4%、学生14・6%、看護婦・理容美容師12・9%、主婦12・8%、工員8・6%、家事手伝い6・5%、販売従業員6・4%、サービス従業員5・9%、公務員5・3%、農漁業0・6%、無職その他10・0%

○読者が併読する週刊誌 一位は『女性自身』以下『週刊明星』

『ヤングレディ』『女性セブン』が続く。

また、『読者世論調査』^年によれば、同時期の『週刊平凡』の人気度は、65年・66年・67年いずれも第五位である。ちなみに第一位は、65年『女性自身』、66年『サンデー毎日』、67年『週刊朝日』であった。

さて、このような性格をもった雑誌の連載恋愛小説に、三浦はどのような姿勢で臨んだのであろうか。三浦の掲載小説のタイトルを次にあげる。

(全二五話)

- 第四話「勝手すぎる男」(65・7・1)
- 第八話「抱きしめてほしいの」(65・7・28)
- 第十二話「危険な関係」(65・8・26)
- 第十六話「星空が目にしみる」(65・9・23)
- 第二〇話「涙なんか見せたくない」(65・10・21)
- 第二四話「ひとりぼっちの街」(65・11・18)
- 第二八話「赤ちゃんができた」(65・12・16)

- 第三三話「星空の下は孤独」(66・1・20)
- 第三六話「もの悲しい過去」(66・2・17)
- 第四〇話「泣きだした彼女」(66・3・17)
- 第四四話「結婚する前」(66・4・14)
- 第四八話「さらば東京」(66・5・19)
- 第五二話「奥さんに悪い…」(66・6・16)
- 第五六話「結婚申し込み」(66・7・14)
- 第六〇話「夏だけの恋人」(66・8・11)
- 第六四話「まさか、あの彼が…」(66・9・8)
- 第六八話「外泊してから」(66・10・6)
- 第七二話「姉の恋人」(66・11・3)
- 第七六話「若い母親」(66・12・1)
- 第八〇話「チケット罐の恋」(67・1・5)
- 第八四話「芳江の芝居」(67・2・2)
- 第八八話「冷たいリング」(67・3・2)
- 第九二話「消えた恋人」(67・3・30)
- 第九六話「ふたりの秘密」(67・4・27)
- 第一〇〇話「佐枝子の嫉妬」(67・5・25)

小説の内容は、後掲の梗概を参照いただきたいのだが、主人公の多くが、上京した独身女性である。その中で第三六話「もの悲しい過去」は他の小説と異なり、作者が顔を出している。冒頭に「きょうは、ちょっとおむきを変えて、わたし(作者)の知っている森安君という青年のことを書こうと思う」と断りを入れ、末尾を「ひと口に恋といっても、なにもロマンチックで派手な曲折に富むものばかりとは限らない。森安君のような素朴な悩みをのり越えて、より堅固な愛を育てている恋人たちが、いかに多いことか。ひんな人たちのためにも、わたしは

森安君の恋を『恋愛百景』のひとつに入れねばなるまいと思ったのである。」と結んでいる。「恋愛百景」では当初から毎号小説の後に「この小説についての感想、ご意見をどしどしお寄せください。またこの小説でとり扱ってほしいという悩み、体験、問題もどうぞ。採用の分にはお礼をさしあげます。」という編集部からのメッセージを載せていた。

また、三浦は67年1月に創刊された『ジュニア文芸』（小学館）において、創刊時から71年8月に終刊するまでの間、五五回に亘り「人生相談室」の解答者を務めた。後にその内から六四篇を抜萃し『青春相談室』として71年9月に秋元書房から出版しているが、そのあとがきに次のように述べている。

私は、「人生相談室」の解答を引き受けたときはまだ三十代のなかばでした。人生経験も豊かではなく、私自身いまだになにかと悩みの多い人間ですので、こういう役には不向きではないかと思っただけですが、年下の世代の悩みと一緒に悩んでみることもまた自分の人生経験の一つだと思い直し、たとえば公園のベンチで弟や妹から打ち明け話を聞いてそれに自分の意見をいつてみる、そんな気持ちで始めたのが、いつのまにか五年も続いてしまいました。ここに書かれている姿勢は、第三六話の作者の言葉と重なるものである。前述の調査にあった『週刊平凡』の読者層に、寄り添うように小説を書いているのだ。

つぎに各話の梗概を記す。

「勝手すぎる男」（第四話）

登志子は商社会社に勤めながら定時制高校を卒業。正社員になった翌年に、私大卒の藤岡が入社し同じ課になる。登志子の父は他社の重役専用車の運転手。母は長患いの後、藤岡が入社した年の夏に死去。

三浦哲郎初期恋愛小説

虚脱状態の登志子に藤岡が接近する。社員旅行で誘われ、ずるずると肉体関係をもつ。藤岡は会社の他の女子社員二人とも関係があった。登志子は会社を辞めパートに転職する。大学生の康夫はパートの客で、田舎育ちらしい朴訥な人柄で清潔、飾り気のない態度言葉に登志子は惹き付けられる。別れてから一年後藤岡が電話してくる。誘いを断り切れず、待ち合わせの喫茶店に行く。復縁を迫られたが断った。

「抱きしめてほしいの」（第八話）

上京して会社の寮で暮らしながら勤めていた三樹子は、一年前に東京の大学に通う登（高校時代の死んだ友人の兄）と偶然出会う。都会暮らしの先輩として相談したりする内、登もよく面倒を見てくれた。惹かれているが親しくなってアパートに訪ねたりしても、登は指一本触れない。三樹子はそんな登が歯がゆい。登に誘われて大学野球を神宮球場に観に行った。祝勝会で登も三樹子も酔った。登の同級生小島が登と三樹子を送るといつてきた。三樹子は一人になったが小島は離れず、「登には婚約者がいる」と告げる。酔っていた三樹子がかつとなってしまった。小島が不意に三樹子を抱きしめ、叫ぼうとした三樹子の口を小島の口がふさいだ。

「危険な関係」（第二話）

東北から中卒で上京し肉屋で働いて五年になる清子は、偶然中学のときの国語教師佐村に会った。中学時代密かに憧れていた先生だった。佐村は童話を書いていたがあまり売れず、妻が銀座のクラブでホステスをして生活を支えていた。清子は何度か先生を訪ねるようになり、次第に派手な身なりの妻を先生に相応しくないとと思うようになる。憧れが憧れ以上のものになり、なんとかして二人を別れさせる方法はないかと思うようになっていった。

三浦哲郎初期恋愛小説

「星空が目にしみる」(第一六話)

高校卒業後郷里北陸の町を出て上京し、会社勤めをして二年になる千秋には、会社の短歌同好会で親しくなった豊という恋人がいた。清潔な恋人同士である。千秋は秋祭りに帰郷し、高校時代に嫌っていた森川に会う。大阪で働いている森川は快活になっていて、千秋はつい気が緩んだ。高校時代よく談話を開いた川原に着いたとき、森川が突然千秋を襲った。東京に帰った千秋の変化に豊が疑問を抱き、秋の海に誘った。千秋は意を決して郷里でのことを話そうとする。なにか本当のものがそこから始まるような気がして。

「涙なんか見せたくない」(第二〇話)

陽子は二年前の高校三年の時の友人たちと旅行中に箱根で、東京在住の敏男と知り合う。ペンフレンドとして手紙のやりとりをする内に、恋心を抱き結婚したいと思う。高校を卒業して上京。相変わらず敏男は髪はぼさぼさで無口だが、陽子にはそれがシックに見えて、いかにも金持ちの息子で画家らしかった。三ヶ月音信が途絶え、敏男の家を訪ねた。敏男は貧しいガリ版書きだった。「何故来たんだ」といわれ、不幸にも怒ってしまい「あんた、私を騙していたのね」と陽子は叫ぶ。「帰れよ」といった敏男の目に涙が盛り上がっていたのに気付かなかった。

「ひとりぼっちの街」(第二四話)

信州出身の木下房子は高校二年生のとき、湯治場で東京Q大生の花田と出会い恋心を抱いた。房子は高校卒業後上京しタクシー会社勤めしていた。タクシー会社の事故で搭乗していた木島の見舞いに社命で出かけ、それ以来交際していた。ある日、木島に性的関係を求められ拒否したが、それから信じられなくなり二人の関係はぎくしゃくしていた。そんなときに花田と再会した。木島に対してイライラが募り、

口論となって走り去った。泣きながら花田を想い、花田に自分を投げ出したくなってアパートに行った。留守だったが帰るまで待とうとする。

「赤ちゃんができた」(第二八話)

勤めている美容院の家族との旅行の帰途、葉子は列車の向かい側に座った山男の野口と親しくなる。孤独そうに見えた野口に惹かれ、文通が始まるが、一方的な文通で住所は不明だった。誕生日に肉體関係をもち妊娠した。不安になった葉子は野口の会社に電話し、妻子がいることを知る。子どもの病気で欠勤した野口の家を探し当て顔を見るが、妻らしき女性を見て、指定された喫茶店に行かず、帰宅する。数日後妻子がいても寂しく、君を愛する気は変わらないと書いた手紙が届く。葉子は子どもを産んで野口をつなぎ止めようとするが、診察を受けた医師から、想像妊娠だといわれる。

「星空の下は孤独」(第三二話)

洋菓子店で働く満里子は、社員旅行で系列工場で働く岡本圭吉と親しくなる。正月三日夜、圭吉に芸者の子で私生児だと打ち明けられる。満里子は継母育ちだったが、圭吉の孤独に同情した。会社の車が事故を起こし、同乗していた圭吉も怪我をした。圭吉の父親に借金のいいわけをするために、運転していた高田が圭吉を乗せていたと聞き、満里子は圭吉の父親が洋服屋で健在なのを知る。庶務課の友人浅子に、圭吉は両親健在で四人兄弟と聞かされ驚く。さらに広瀬浩子から、自分も圭吉に芸者の子と聞かされたし、他にも沢山同じ手で騙された人があるといわれ、愕然とする。

「もの悲しい過去」(第三六話)

作者は運動不足解消のために、氏神様の社の裏の森で素振りと縄跳

三浦哲郎初期恋愛小説

園部が千沙子に接近したので、梶原が離れていったのだった。夏の終わりに梶原から誘われたが、断ることにした。千沙子はいつも自分を巡って起こる愛のトラブルを避けようとしたのだった。六年前に死んだ恋はそのまま眠らせようと思った。

「結婚申し込み」(第五六話)

雑誌社事務員の海野桐子は両替をしてもらいに行った先の寿司屋で、竹治に会った。寿司屋の女将さんの弟で、ヤクザのような目つきの鋭い男だった。桐子は、竹治の読んでいた競輪新聞を切っ掛けに、「競輪の自転車が風みたいに走るところを見るのが好き」と告げる。それから何度か顔を合わせるが、段々竹治の口数が減り、以前より熱心に仕事をしているように見えた。梅雨明けの頃女将さんが、竹治が桐子を気に入り結婚したがっているという。元競輪選手の竹治は八百長事件に巻き込まれて止め、一時ぐれていたが、仲間の殺人事件で足を洗ったのだった。店を来年にも持たせようと女将はいった。しかし、竹治は桐子のいった「自転車が風みたいに走るところ」に刺激を受けて、朝自転車に乗っていて事故死した。桐子に、掛け替えのない人を失った悲しみがこみ上げてきた。

「夏だけの恋人」(第六〇話)

わたし(アヤ・一九歳)は東京から友人のサヨとユカリの三人で、西伊豆に出かけた。砂浜でハマグリを足で探り採っていたが、友人たちはどこかに行ってしまう、一人残された。その内、足を貝殻で怪我してしまふところを、ケンに助けられた。ケンは一人で民宿に泊まっていた。海に浮き袋を浮かべて、わたしを楽ませてくれた。月夜の晩にもこうしたいといった。翌々日星降る夜に出かけると、ケンが後からついてきて、浮き袋に乗せてくれた。その晩は初めから決まっていたかのように、唇を重ねた。それ以来毎年、西伊豆の入り江

の浜で会った。他の海辺の恋人たちよりも遙かに深い、見栄も打算もない純な恋仲だった。ケンはわたしの夏の恋人。他では会ったこともない。

「まさか、あの彼が……」(第六四話)

文林堂書店の図鑑棚にいつも来て本を見る男を、同僚の茂子は万引き要注意というが、由美子はそうは見えなかった。新規配達顧客となった木村ナイロン株式会社に配達に行った由美子は、そこで図鑑の男細倉民男に会った。細倉は倒れて歪んだ自転車を直してくれた。蝶が好きで図鑑を見ていたといい、その後も度々来たが、とうとう一冊購入し来なくなった。由美子は細倉が来るのを楽しみにしていた自分に気付く。しばらくしてまた来店し、更に高い図鑑を本当は欲しいという。自分がプレゼントしたいと小遣いを貯め、充実した日々を過ごすが、店に来なくなると寂しいという新しい悩みができた。

「外泊してから」(第六八話)

モナリザ洋装店の店員芳江は同僚の妙子、君代と二人のボーイフレンド金星堂時計店の店員二人と、新入店員の藤木の六人でハイキングに出かけた。夕方まで楽しく過ごしたが、芳江だけ気分が悪くなり、眠気に襲われてしまった。翌朝目覚めると、自分に付き添った藤木がいた。店に戻ると妙子に、自分たちも宿に泊まったと嘘をつくように頼まれた。ところが、店主が宿に電話して嘘がばれた。芳江は詰問されて、他の二人のことは白状したが、藤木とは何もなかったと訴えた。しかし信じてもらえず、律儀な店主は金星堂に働きかけて、交際禁止になった。芳江と藤木は信じてもらえないことに怒り、定休日に出かけて怒りをぶちまけ合い慰め合うようになった。大人の疑い深さが、純な二人に背信の匂いのする妖しげな恋の付け火をしようとしている。

「姉の恋人」(第七二話)

銀行員の昌枝は、受験期に母の病氣と死が重なり進学を諦めた。姉は大学生で、クラスメイトの楠本が恋人だった。日曜日に父はゴルフに出かけ、姉に小遣いを渡されて、「映画にでも行ったら」と家を出された。出がけに玄関で楠本に会い、体よく追い出されたと思った。映画の男優が楠本に似ていてドキドキした。ぶらつくよりも庭いじりがしたくなって帰宅したら、鍵が掛かっていた。合い鍵で入ったらステレオの音が低く鳴り、二階の姉のベッドから姉の笑い声や、楠本のつぶやきが聞こえた。昌枝はこれまで押さえていた姉に対する嫉妬がむき出しになった。自分は楠本に恋していることにも気付いた。昌枝は家を出てゴルフ場に電話し、父にすぐに帰宅するように伝えて貰った。近所のものだと名乗った。

「若い母親」(第七六話)

雪子と冬吉は毎週土曜日にデートするが、冬吉は必ず郊外の自宅に十時半までに帰る。母親が一人で待っているのだ。冬吉はついに雪子にプロポーズする。すぐにOKしようとしたが、言葉が出なかった。必ず時間通りに帰宅する冬吉と母子の情愛のため息が出る。羨む、妬む、憎む、嫌悪するそんなため息が出る。次の土曜日に雪子は冬吉の母に会いたいという。冬吉を愛しているが、一緒に暮らす母親に対する不安があった。はじめは冬吉も迷っていたが、いきなり母を訪ねることにした。家にいつもより早く帰ることになったが、内鍵がかかっていた。早く帰宅した冬吉に母は驚いていた。何かはらはらした様子だった。アルバムを取りに二階に上がった冬吉は、男を見つけた。冬吉は真っ青になり、鋭い他人を見ようような冷たい眼で、雪子を見た。

「チケット罐の恋」(第八〇話)

折原淳子は東北の小都市でバスの車掌をしている。使用済みのキッ

プを入れるチケット罐に、小さな結び文のラブレターが入っていた。誰宛なのか分からなかったが、自分宛だとは思えなかった。客も多く混雑時など誰が渡したかも全く分からなかった。なんとか見つけようとするが、分からないまま三度そんなことがあった。二度目と三度目の運転手が篠田だったが、酷いどもりであまり話をすることがなかった。篠田にだれか休憩時間に乗ってこなかったか訊いたが、誰もいないとのことだった。その篠田がダンブカーに追突されて事故死した。労務課長から、篠田の機の引き出しから最後の手紙が入っていたと渡された。もう二度と自分を訪れて来ないかもしれない掛け替えのないものを失った悲しみがこみ上げて、声を忍んで泣いた。

「芳江の芝居」(第八四話)

芳江と川野は相思相愛だった。一日遅れのクリスマスの夜、初めて結ばれた。一月の末に芳江は川野に「妊娠した」と嘘をついた。川野は「生んでいい」といったが、生む前に考えさせ欲しいといった。何を考えるのかいってくれば、嘘だというつもりだった。暮れに帰郷したとき同級生たちに、男に騙された話ばかり聞かされて、企んだのだ。川野は苦心していたが、「芳江と結婚する。まだ若く家庭を背負うのは重荷だが、よい家庭を作ろう」といった。芳江は涙が出そうなほど有り難かったが、もう誤魔化すことはできず、あれは嘘だったと告げた。川野はきっぱり芳江から去って行った。

「冷たいリング」(第八八話)

アップル美容院店員の葉子は、他の三人の同郷の店員の中で一番年長である。女主人の実家のりんご園から、毎月リングが一箱送られてくるのがみんなの楽しみだった。去年の十月届いたリングの中から「誰よりも」と読める文字のあるリングが一つ出てきた。翌月は「君を愛す」。十二月の箱からは「A・Kより」だった。それを見せられ

三浦哲郎初期恋愛小説

た葉子は、故郷で捨ててきた素朴な男小島秋夫だと分かった。彼なんかどうでもよかった。葉子は妊娠していると思っていて、相手が必ず結婚してくれると思っていたが、振られたらしい。振られて帰宅した葉子の机の上に、一月に送られた「葉子さん」の文字の入ったリングが、女主人の手で置かれていた。冬のリングは冷たかった。

「消えた恋人」(第九二話)

去年、白井早苗は会社の同僚たちと秩父長瀨へピクニックに行った。帰り、電車で正木と知り合った。デートを重ね急速に親しくなったが、クリスマス過ぎる頃から急によそよそしくなり、正木は引越してしまった。思い当たることは肉體関係を持ったことだ。「それまでが花よ」と同僚がいうのを聞いたことがあった。正木の親友倉田とは六大学野球を観に行ったときに紹介されていた。正木の行方を倉田に捜して貰い分かったが、「知らない方がよい」と教えてくれない。何故なのか考えれば考えるほど気が変になりそうで、ある日倉田を訪ね問いただした。倉田はしぶしぶ「正木が女と同棲していること、女は妊娠している」ことを告げた。早苗は泣かなかった。倉田につかまらせて貰ってわたしは大丈夫と思った。正木を忘れるといった倉田を恨んでいる内に、彼に心を奪われていたのに気付いてはいなかった。

「ふたりの秘密」(第九六話)

去年の秋、寺下直子と吉川達夫は社員旅行で知り合い、親しくなった。毎日曜日デートするが、プラトニックな愛の無邪気な恋人同士だった。それが一ヶ月前達夫が、お互い秘密を持たないようしようとして提案した。直子も賛成したが、過去の疵が頭に浮かんた。次の日曜日達夫が、小学六年の頃病気で入院して二ヶ月後の退院が迫った夜、親切だった看護婦が下着でベッドに忍び込み覆い被さられた。自分は童貞ではないかもしれない、と打ち明けた。次のデートのとき、達夫は快

活だった。その次のデートで直子が、「中一のとき、浪人中の親戚の男に、流感で寝ていて太ももを触られた」と打ち明けた。「処女じゃないかもしれないと思っているのか」と達夫にいわれると同時に唇をふさがれた。その夜以来、タブーだったセックスが二人を支配した。直子は「ああ違う。私たちはこんな風になるんじゃない」と思っているが、もうどうすることもできなかった。

「佐枝子の嫉妬」(第一〇〇話)

ユーカー用品店店員の佐枝子と、彩光社電気店店員桐山圭造は商店街慰安旅行で知り合い、親しくなった。三日に一度朝、銀行へ前日の売り上げを届けに行く役目が回ってくる。佐枝子はそのときに彩光社の前を通り、圭造と合図を交わすのが嬉しい。二人は結婚の約束もした。ところが、彩光社へ商品を卸す問屋の二〇歳の娘が、ときどき圭造を乗せて配達するようになった。主人にいわれて断れずに乗っているが、佐枝子は気になってつい皮肉をいうようになった。結婚の約束をして女房気取りで焼きもちを焼いたり、お節介な口出しをする佐枝子に、圭造は身に覚えがないと情けなくなり、幻滅を感じるようになった。佐枝子はしばしば電話して、女のことをいうのは愛情表現の一つだと思っていたが、圭造にどれほど幻滅を感じさせているのか気付かなかった。

以上が三浦執筆分全二五話の梗概である。

三浦は井伏鱒二との対談で「僕は、今もこれから、やはり短編小説を自分の仕事の本道にしようと思っています。」「僕がまだ学生の頃、先生が、ああ、三十枚のいい短編が書けたらなあ、と時々おっしゃっているのを伺っていました。それが僕の根底のところにあると思います。」「先生がそう思われるなら僕も、という思いがその頃か

らありました。」と述懐している。

周知のように、三浦哲郎は後に「短編の能手」といわれるようになるのだが、三代半ばの三浦は「恋愛百景」を、それまでより広い読者層を対象とし、読者の関心事をテーマとした短編小説の、修練の場と捉えていたのではないか。

【注】

注1 発行年等は特に断りのない限り西暦とし、下二桁を表示した。
例えば、一九六〇年は60年と表記した。

注2 『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集 言語・文学・文化』平成十年四月一日発行 和泉書院

注3 『読者とともに20年―平凡出版株式会社小史―』昭和四十年十一月十日発行 平凡出版株式会社

注4 「さよなら、百万雑誌『平凡』四十二年間の幕を閉じて―」清水達夫『文芸春秋』（65巻14号 87年11月）所収

注5 注3に同じ

注6 『見る雑誌する雑誌―平凡文化の発見性と創造性―』江藤文夫 66年10月10日発行 平凡出版株式会社 非売品

注7 『読書世論調査30年―戦後日本人の心の軌跡―』昭和52年8月 毎日新聞社

注8 「書くのは愉し」一九七九年十月一日発行『波』（新潮社）『井伏鱒二全対談 下巻』（二〇〇一年四月二十五日発行 筑摩書房）所収